

所員の印象

「の「一風変わったボス」をTIPLOの所員たちはどう見て いるのだろう?

陳傳燿は、「気くで家族思いの人。素晴らしい家庭をもつて いる。」と敏生のやさしい一面を指摘する。

張蒼浪は、「彼は一年後輩だが、大学時代からの親友。情熱的で義理がたい。とても馬が合う。英語と日本語は達人。努力の人で、いつも完璧を求める。強い信念と精神力。普通の人にはまねできない。常に物事の核心を突く。当事者の説明を聞きながら、突然、『大丈夫。まかせなさい。』の一言で、相手を即座に安心させてしまう。いつも自信満々なのだ。しかし頭は柔らかい。時代の変化にすぐ対応する敏捷さは、大したものだ。」と敏生の成功を裏付ける。

敏生に付き従つて十八年の蕭艷珍は、「外回りで忙しい時など、開廷ぎりぎり十分前に駆け込んで来られることがよくありました。ファイルを調べ、案件の内容をかいづまんと説明すると、一、二分で了解。そのまま出廷される。中にはまったく接触したことのない案件もあつたのに。」と敏生の機知に感服する。

劉宗欣が感服するのは敏生の「睡眼の構え」。一九九三年のIPBA会議、シンガポールの代表が急遽帰国そのため、順番を繰り上げて演説したいと言った。演題は「Membership drive」。会員募集の強化を訴えたものだが、口に泡を飛ばす熱演でライトの時間が迫る。やつと気づいた壇上の彼。時計を見て一言、「I've got to drive to the airport」。の時であつた。会長席でざつと目を閉

じ、眠っているかと思われた敏生が、突然、目を見開いて「口をはさんだ。「Oh! Not to drive membership?」。会場は爆笑の嵐。長口舌にうんざりしていた人々は拍手喝采した。

陳和貴と敏生の付き合いも長い。いちばん印象に残っているのは、まだ入所したてのころ。初法廷に弁護士のガウンが間に合わなかつた彼は、敏生から借りることにしたのだが、「TIPLOの大弁護士ならさぞかし立派なガウンを」と思いきや、母堂の手仕立て。着古したものだつた。颯爽のデビューを思い描いていた陳和貴。不似合いなガウンで好奇の目を浴びてしまった。

商標助手の一人は、「見かけは厳格な感じだが、ユーモアがあつてさばけた人。こんな事があつた。帰宅しようとしたら、所長が外からほかほかの饅頭（マントウ）と肉でんぶを抱えて戻ってきた。一つ私に手渡すと、『私はこれが大好きでねえ』と嬉しそう。こんなものが好物とは?と驚いたが、よくよく観察していると、所長はとても質素な人。お客様にはあんなに気前がいいのに。」

文書の発送係は、「所長はいつも自信満々。自信をもたなくちやいけないよ、と発破をかけられる。」特許部の一人は、「遠くから見るといかめしいが、近くにいるとしても暖かい人。絶妙の話術に興味は尽きない。顧客との関係は『heart to heart』がモットー。心を割つた友達のような付き合いもできると、教えていただいた。冗談の中にも、若い者を励まそうという情熱が感じられる。」

欧米化学特許部の一人は、「所長は頭の切れる硬骨漢。面倒な特許案件でアメリカの顧客がわざわざ訪台。中央標準局審査委員会の諮問を受けるという事件があつた。その日は重大会議。五時すぎに会議を終えた所長は疲れを見せず、討議に入つてそのまま十一時すぎまで。アメリカの顧客は本国では一日十四時間働くという強者。それが敏生の前では形無。疲労困憊を隠せなかつた。一方、所長の頭は最後まで明晰。素人には理解できない技術的な問題も、核心をつかんで分析して見せる。それが

私には大変な驚きだった。頭のよい人は詳細が分からなくても、瞬時に物事の核心に迫る。体力、気力も重要だ。思考能力を長時間維持するのは、単に頭がよいだけでは無理だ。傍らで見ていた私は正直言つてへとへとだつたが、所長には一言『Tough guy』と喝采を送りたい気分だった。』

特許部のもう一人は、「人材を育てるためには、金に糸目をつけない人。園丁を自任する所長は、精魂込めて花を育てるよう、所員一人一人の特性を把握し、それぞれに合った指導をしてくれる。」
欧米商標部の所員は、「入所してもうすぐ十八年。TIPLOは私を育てくれた家。十八年前、応募に来た私は、所員の数だけ一人一台タイプライターの置いてある事務所に新鮮さを覚えた。すぐに『こここのボスは先見の明がある人に違いない』と判断。役所をやめて入所した。学校では聞いたこともないTM.PATENTというこんな業界に、何でこんなに大勢の人が?ととても驚いた。中山北路にいたころはせまい所内に押し合いへし合い。それでも和気藹々。大家族のような雰囲気。所長は親しみやすく、しかも威厳をもつた家長です。」

コンピューター助手は、ある日、トイレの洗面台を洗っている敏生を目撃。「こだわらない人だ」と感心している。

「TIPLOで働くのは私の誇り。」と言うのは法律訴訟部の秘書。「所長はとても気さくな方。入所したてのころ、チヨコレートをいただいたことがあります。言葉を交したのはそれが初めて。その時から私のあだ名はチヨコレート。とても気に入っています。」

元タイピストの職員は、「事務所開設当初、日本関係に比べ、欧米市場がいま一つ伸び悩んでいたのですが、所長はあまり気にしていない様子。ただその頃、勤務時間が終わると毎日、青い目の美女が事務所を訪ねてくるので不思議に思つていると、所長はドイツ語のレッスンを受けていたのです。」

重たい荷物を抱えて所長が欧米に飛んだのはそれからまもなく。お帰りになるとすぐに、欧米業務がみるみる増えていきました。」

法律訴訟部行政組のチーフは、「所長は所員の気持をとても大切にしてくれる。事務所を一度辞めた職員が、外でうまくいかずに戻つてくるケースも。所長は過去のことを咎めず、受け入れている。」

欧米商標部主任は、敏生の指導を「独裁式民主」と呼んでいる。敏生と知り合ったのは前の職場で。「TIPLOと共同して偽造案件に取り組んでいたその法律事務所に、所長と、当時の法律部主任陳博雄さんが訪ねてきた。あの時、陳さんは背広にネクタイでピシッと決めていたが、所長は普段着で軽快なスタイル。ところが腰を下ろすと、とたんにボスの重みが出て、リラックスした中に威厳が見られた。」

特許手続部のある職員は、こんなエピソードを語ってくれた。「一九七六年の春、社員旅行で宜蘭南方澳の名勝を訪ねた。険しい道のりで全行程踏破は至難の業とされる五峰旗の滝に、所員約四十人がチャレンジ。頂上を制したのはわずか八人。その中には所長も入っていた。所長は他の七人に『台北に戻つたらたらふくご馳走してやる。』と上機嫌。所長の強靭な精神力と子供のようなはしゃぎぶり。あの時の情景は今でもよく覚えています。」

総務部の会計係は敏生のもう一つの一面を指摘する。「所長は台湾で生まれ育ったことに誇りを持っている。移民の風潮に流されることなく、海外への投資も慎重。ある時所長から『君は台湾人か?』と聞かれ、『そうです。』と答えると、『台湾人なのに台湾語が話せないのでは困る。母国語を忘れちゃいけないよ。』と言われ、それからは所長と台湾語で話すようになった。」

見習弁護士のある所員は、「所長は活力があつて率直な人。法律部門に入つて二ヶ月。アメリカに

行つて弁護士試験を受けたかつた私は、何とか在職のままで、と考えていたから、所長をどう説得しようかといろいろ思い巡らし、こう聞かれたらああ答えようと、万全の準備をして所長室に。私の話を聞き終わった所長は、二秒間考えてあつさり『OK』。拍子抜けといった感じ。夢を見ているようだつた。それから三年、国内の司法試験には『毅然として』離職。合格してから再度、TIPLOに戻ってきた。向上心のある若者には力を貸す。所長はそういう人だ。』

タイピストの一人は、「勤めている職場が閉業したり不景気の影響で、何度も職を換えてきたので、職場とともに成長し、生活が安定していくTIPLOのようなところに来られて幸せだと思つています。交通事故にあつて軽いけがをした時、所長に呼ばれてお見舞の言葉をもらつた事がありました。私のような者にまで気をかけて下さつて、とても感激しました。」

法律訴訟部の弁護士で、著作権部主任も兼ねている楊憲祖弁護士は、「昔なじみを大切にする人。一度離職した所員でも、よほどの問題がなければ、快く迎え入れる。これがまたTIPLO成功の鍵の一つなのかもしれない。」

感じ方や見方は人それぞれ。とくに人の評価となれば主観的な要素も加わる。まして敏生はTIPLOの家長。所員は日常をともにして、彼のさまざまな側面を観察している。中には、人に対する要求が高い、厳格だ、少し独裁的、などの評価も出でてきたが、彼の「成功」と「努力」、そして「子供のような心」を否定する者はいなかつた。

「TIPLOの今日あるは、私一人の力ではない。」敏生が特に感謝を捧げたいのは、方憲彦、林淑卿、劉虹秀、林寅生、林明乖、蕭艷珍、曾碧葱、黃雙雙、王素心、柯錦雀、薛春蘭、陳金福、林珮玉、林紀彥、王瓊英、陳麗媛、黃雲雀、蔡淑莞、楊憲祖、邱美惠、莊素琴、李文傑、林桂秀、楊煌仁、

陳和貴や高山峰など、十二年以上のベテランたち。他にも、七十に近くてもなお矍鑠。陣頭指揮に当つている日本特許手続部の楊金成部長、アメリカにお嫁に行つた林美珍、独立した陳博雄、林美齡夫婦、退職してニュージーランドに移民した潘耀西など、彼らがいなければ今日のTIPLOはない、と敏生は心に銘記している。